

令和2年7月11日発行 春燈 / 第75巻第7号(毎月11日13日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

7
月号

2020 July



成瀬櫻桃子の句

夕顔や母に無かりし男運

「春燈」昭和五十九年

お母様の男運の悪さはご自身の運とも深い繋がりを
持っている。幼少より女手一つで育てられ、母との絆の
強さ、家族愛を大切にしてきたと思われる。しかし「沈
丁の香のたかぶる日子に逢ひに」にあるように娘さんと
の縁も浅く、施設にゆかねば会えないなどの境遇。「夕顔」
「沈丁の香」の静かな季話の取り合わせが、ご自身の心情
を表していると思えるのです。

赤羽陽子

成瀬櫻桃子の句

夏草やローマを語る石と石

「春燈」平成七年

地中海の碧空の下、フォロ・ロマーノの夏草の中に立
ち現れた壮大な遺跡と巨石の群れ、その光景に師は名状
し難い目眩めくほどの感動を覚えられたに相違ない。
その感動をまるごと俳句と言う短詩に収めるにはと一
瞬立ち止まって、ここは一步退って目の前のモノに全てを
委ねるしかないと思われた。「石と石」と言う抒情を越え
たやや奇抜な表現が生まれた瞬間ではなかったらうか。

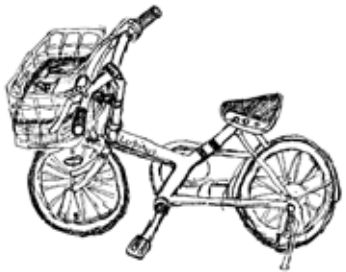
石田康明

安立公彦

文机の古書に師の名や四月尽
 晴れやらぬ空の潤ひ傘雨の忌
 母の日も母の忌も過ぐ沖つ虹
 風薫るひとり櫳に寄り添へば
 さくらんぼ路地に人影無き日かな



燈下集



○ 河本由紀子

籠城の日々ひととき遁れ青き踏む
 鯨群来今は昔の語り種
 桜褪せコロナウイルス弥増せり
 令和二年の国難に耐へ春逝けり
 聖五月絵手紙ばばを元気づけ

○ 永井恵子

中日や畳にこぼす供華の水
 武家屋敷正門開く落花かな
 をだまきの花にいにしへ人思ふ
 休校の校庭閑と百千鳥
 魚の目に切れ長はなし桜鯛

○ 荒井ハルエ

ゆつたりと雲流れゆく木の芽時
 予定なきひと日や朝の目刺焼く
 水音の曰ごと高なる春田かな
 この場所で亡き人と見し桜かな
 夜桜や幹にまだある日のぬくみ

○ 片桐てい女

光るもの啜へて雲雀何処の宙
 旧曆三月十五日スーパームーンのピンク映ゆ
 耳よりな話ばかりの万愚節
 自祝とや幹に名を彫り巢立鳥
 老鶯のこだま返して他は自肅

○ 石田康明

紫木蓮充分すぎるほどの恋
籠もりぬて艶めく春のメールかな
木村屋の桜あんぱん春惜しむ
住み古りて青梅いつか実をなます
二メートル空けて並んで祭待つ

○ 宮崎洋

百千鳥陽明山の朝を告ぐ(祝・台北句会四句)
百千鳥自由の空に声競ふ
うぶすなに帰る花びら霊薺之の忌
空さみしさとど明るし霊薺之の忌
けふ春が終はる寺山修司の忌

○ 持田信子

少年の壮志を見遣る松の芯
春耕や流れる雲へひとり言
かたかごの花へ膝折るカメラの目
芋植えて俄農婦をたのしめり
筍掘つて稚抱くやうに持ち帰る

○ 平沢恵子

亀鳴くや日毎に重る小銭入れ
桜糞降る庄し来る疫病かな
往来の人みな無言霾れり
傷みたる絵本の匂ふ穀雨かな
こでまりの花や夜陰に濡れてをり

○ 中里よし子

身ほとりに友ひとり有り牡丹の芽
花楓五指ゆるやかにひらきけり
人訪はず訪はれず蝶の昼無音
唐鋤四丁の研ぎを預かる竹の秋
筍掘ると古刹裏山脈はへり

○ 木村みどり

花過ぎの無人駅舎に鳥の声
コロナ禍の町に今年も燕来る
朝寝する他に術なき自粛かな
独活掘つて母直伝の酢味噌和へ
あまびえの絵を身边に春の果

○ 大西由美子

空つぼの重たき春を持て余す
東風吹くやコロナ禍の世のよそよそし
人ごゑを遠くにさくら散りにけり
疎まるる重たき愛や八重桜
桜糞降る校庭のがらんどろ

○ 池上昌子

春愁や箱に亡夫とのペア時計
真正面の富士の聳ゆる茶山かな
満天星の花芽見付くる垣根越し
メタセコイヤの古巢に戻る鴉かな
紙鳶故郷の空に無二無三(空子母を悼む)

○ 近藤真啓

一粒は瑠璃の輝きしやばん玉
改札を自在に通ふ木の芽風
永き日のポストに届くマスクかな
老荘の思想に耽り花は葉に
普段着で遠隔講義夏来る

○ 山下健治

リラ咲くや散策ルート変へてより
遠山の雲のむらさき鳥帰る
鳥雲に帰巢本能吾にあるや
遅き日やスタンドバーに人の影
影見えぬコロナ論争春逝かす

○ 小林紫乃

万葉の多摩の横山木の芽張る
休耕田げんげ明りとなりにけり
かたかごの花の群落息を呑む
春夕焼クレインの先届きさう
雨粒の水玉模様池は春

○ 山下朝香

明日待つ衣桁にかくる花衣
ひとひらの花とくぐるや躰口
おしやべりの赤白黄のチューリップ
小米花偽りのなき白さかな
人を避け人を思うて春惜しむ

余言

安立公彦

折からの新型コロナウィルスによる非常事態で、葬儀も常
のように出来なかったことと思われる。惜しまれる同人
だった。〈妻の杖借りて試歩する小春みち 甲武信〉。
以下追悼句を記す。

鳴き止んで窺うてをり夕蛙

山内 四郎

「蛙（かはづ）」は、古来詩歌に馴染の深い小動物である。
「花に鳴く鶯、水に棲む蛙の声をきけば、生きとし生ける
もの、いづれか歌を詠まざりける。（古今集序）」。

この句、「窺うてをり」に、蛙の生態が善く出ている。
その動き、その鳴き声、古来私たちの生活の中に、これほ
ど近く、愛らしく棲んでいた小動物は、外にはこの序文に
もある通り、「花に鳴く鶯」くらいだろう。「鳴き止んで」も、
「夕蛙」を善く写している。夕蛙が愛しく見えて来る。

あつけなく友死にたまふ花筏

松橋 利雄

この句、前書は無いが、去る四月四日に逝去された春燈
同人、柴崎甲武信さんへの追悼句である。今月号には、同
じ追悼句が七句あった。今年の五月号で、「春燈世田谷句会」
が誌上紹介されたばかりである。

甲武信さんの死は、「あっ気なく」そのものとのこと。

夏草や崩るるままの野面積

林 紀夫

「野面」は、石山から切り出した加工していない自然の
石を言う。野面石積は、その石を積んだ石垣。よく格式張
らない石垣に使われている。

この句、「崩るるままの」は善く言い得ている。風雨に
晒された土留めの石積を思い出す。更に「夏草や」が適確
だ。芭蕉の句を思い出す。歴史を感じる句である。

讚美歌にひとり揺れる葱坊主

片山 博介

作者はクリスチャンか。辞書で「讚美歌」を牽くと、啄
木の歌が出て来る。へわがためになやめる魂をしづめよと
讚美歌うたふ人ありしかな。啄木の死は明治四十五年四
月十三日、二十六歳。この短歌を見ると、教会の景が
見えて来るような気がする。同時に掲出句の「ひとり揺れ
る」に、啄木の姿が、ほのと窺えるような思いがするの
だった。「葱坊主」は葱の白い丸形の花。

編集部の皆さんは善く知っているが、作者は毎月の出句
用紙の通信欄に、スケッチを書いている。今月は「燕」。
顔の表情が活きている。美事な絵である。

花二片光を曳きて空にかな
手毬花揺れて雫をこぼしけり
鳥帰る遠き出逢ひの風まとひ
惜春や雲に隠るる甲武信ヶ岳
純粋を尽くして逝けり白木蓮
桜散る星のささめく甲武信岳
冴返るひと足遅き見舞かな

園部 露郷
鈴木 鳳来
木村 傘休
鈴木 静恵
田嶋 洋子
久保 久子
久米 憲子

後の世も母でありたしカーネーション 小張 志げ

辞書で「母」を見ると、「おんなおや」と共に、「物事を
生み出すもと」という開設も書いてある。来世のアンケ
ー卜を採ると、「来世も女親」という回答が大方の女性の思
いだらう。「母の日」に、赤いカーネーションを健在の母
に贈る慣は、広く習慣付けられている。

この句、「後の世も母でありたし」は、多くの女性の思
いであり、一方男性としても、わが身の周辺を見回し、そ

真青なる空へ咲きつぐ桜かな 溝越 教子

一本の桜に咲く花は、初花から始まり、満開の桜となり、
名残の花を経て落花となる。改めて書く迄もないことだが、
桜は花王と呼ばれ、日本の国花である。掲出の「桜」は、
作者の夫君の手植えとのこと。

この句、「空へ咲きつぐ」で景が定まる。桜を仰ぐ作者
の姿が、生き生きと浮かんで来る。周知の通り、春燈誌の
表紙絵は、現在作者の手に成るものである。どの絵も、描
かれた花に生命力が感じられる。ひかりの配分も申し分
ない程だ。今後の益々の健筆を願うばかりである。

けふ春が終はる寺山修司の忌 宮崎 洋

寺山修司の生涯は四十八年。昭和十年生れ、同五十八年
歿。辞書はその生涯を、歌人、詩人、作家、劇作家、評論
家、舞台演出家と記す。敗血症により五月四日死去する。

辞書の解説には、壮健な頃の、襟を立てたコート姿の写
真が付いている。四十八歳で死んだ人は、上杉謙信、織田
信長、真田幸村、淀君、渡辺畢山、大久保利通、三木清、
林芙美子、そして聖徳太子と、揃っている。修司自身、確
かな才能の持主と聞く。掲出句、寺山修司の名のみ記して
いるが、その裏には、修司への熱い贔屓の思いが見える。

当月集

安立 公彦選



この年の桜に罪はなかりけり
入園児一日だけの出番かな
春や春二十四時間持て余す
目標に五百歩足りぬ春の土手
聖五月誕生祝ひのマスクかな

○ 佐藤 玲子

○ 山浦 紀子

○ 室井 津与志

補助輪をはつず自転車風光る

牡丹の開花うながす葉のそよぎ

軒つばめ旧街道の乾物屋

未来図や肩を触れ合ふチューリップ

引売りの烏賊素麺や朝の路地

咲き誇る花に非常時なかりけり

民宿の大黒天にさくら舞ふ

休むこと世の為ならむ春の雲

麦の秋齢は数字と言ふ老夫

三密は生くる証や日の盛

○ 田中 嘉信

○ 佐俣 まさを

暮れなづむ丹沢の嶺々鳥帰る

落ちてなほ矜持保つや白椿

はくれんや千の観音在すかに

木々芽吹く公園のいま浅緑

満開を待たず散りゆく桜かな

水琴窟響く蹲踞昭和の日

おもむろに腕組み解き剪定す

樽縁に父ある如し柏餅

対岸に潤む湯の宿夕河鹿

音高く竹皮を脱ぐ石畳

春燈の句

安立 公彦選



桃は実には夫は彼岸に行きしかな

毎日がひとりの夕餉木の芽和

束の間と言ふには早し四月尽

五月来て君見ぬ暦めぐりをり

朝市の太きアスパラ夏は来ぬ

夏めくやカレーにひそむハーブの香

休校の学舎の窓に若葉萌ゆ

やはらかき古寺の苔波清和かな

校庭はも抜けのからや桜咲く

鷺の立つ池に降り敷く花吹雪

蓬摘むや明日は鎮守に参らうか

春の夢逝きし息子を抱きしむる

春浅し渋民村の古オルガン

訪れしこんぴら歌舞伎花見ごろ

岡山 重実ひとみ

福井 西本 花音

東京 西谷恵美子

神奈川 犬嶋テル子

平野愛子の歌碑ある公園桜散る

紅白の牡丹に胡蝶鏡獅子

花筏愁ひを乗せて流れけり

風車還らぬ日々を廻したる

薪能の焰無窮へ誘へり

青梅の壮志にもがき落ちにけり

春昼や子供飽くまで立ち話

母煮る自肅自肅の泡ピンク

青梅のへた取る子らや喜々として

青蛙姉のポッケに忍ばする

コロナ禍のくらしの変はる花は葉に

経塚の天蓋なすや夏桜

百歳の姉は浄土へ春時雨

明やすの通夜の語りや茶碗酒

神奈川 高橋 寛子

神奈川 辻 泰子

岐阜 高井 修一